



白銀の聖痕III

『未来への選択』

+えっちな短編2本♡

【白銀の奈落が遺した娘】

【罪人の聖女が未来へ託す】

【白銀の翼は四半世紀を超える】

【オルガエンジン】シリーズ

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF

著：XYZ\_L

# 白銀の聖痕3

## 『未来への選択』



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系

ディストピア・ハードSF・メカ・バトルモノ

「オルガ・コード」シリーズ

著:XYZ\_L

## 第3部:未来への選択

### 1. 偽りの凱旋

——聖暦2028年、春。

聖都の大聖堂は、巨大なステンドグラスから降り注ぐ淡い光と、肺を重く満たす甘い乳香の香りに支配されていた。

偽りの凱歌が高くそびえる尖頭アーチの天井に反響し、足元の冷たい白大理石の床を微かに震わせている。

『白銀の奈落』という未曾有の災厄は、教団の叡智と勇気によって完全に浄化された——。

最高指導者である大聖女エレノアの名の下、そのような声明が大々的に発表された。

信徒たちはかの悪夢のような数日間を、早くも都合の良い勝利の歴史として記憶に刻み始めている。

これは、そのための儀式。

息が詰まるほどに清廉で、どこまでも逃げ場のない、巨大な白い鳥籠。

大聖堂の中央祭壇。

そこに、セリナは一人立たされていた。

周囲を埋め尽くす数千の狂信的な視線が、針のように彼女の小さな身体を刺し貫く。

彼女の体を戒めていた、あの屈辱の象徴である『セラフィックハーネス』は今はない。

儀式に先立ち「罪の赦し」の証として、大仰に、そして無慈悲に取り外された。

代わりに彼女が纏うのは、聖女の法衣でも、騎士の礼装でもない。

全ての階級を剥奪された者が着ることを許される、質素な純白の巡礼者のローブのみ。

そのローブから覗く淡い桃色のボブカットが、春の兆しのように儚く揺れた。

罪人でもなく、聖女でもない。



何者でもなくなった彼女は、ただ空っぽの心で正面の玉座を見つめていた。

重い拘束から解放されたはずの身体。

だが、陰核に食い込む銀のピアスの冷たさだけが、決して消えない罪の刻印として、拍動に合わせて生々しく疼いている。

玉座には大聖女エレノアが座している。

その背後には教団の最高幹部たちが硬い表情で並んでいた。

彼らの冷ややかな眼差しが、セリナには痛いほどに理解できた。

この「勝利」がいかに虚しいものであるかを。そして、目の前に立つ桃色の髪の少女が、いかに厄介な存在であるかを。

やがてエレノアが、鈴を転がすような、しかし鋼のように冷たい声で高らかに宣言した。

「聖女セリナ！ あなたの、『白銀の奈落』討伐における功績、誠に見事でした！」

嘘だ。

セリナの心に何の感情も浮かばない。

ただ漠然とした違和感。

そして、祈るように組まされた自らの両手に残る、光となって消えた姉の最期の温もりだけがあった。

「その罪は偉大な功績によって、完全に赦されました！しかし、かの奈落が世界に残した穢れは、未だ各地に深い傷跡を残しています！」

エレノアはゆっくりと立ち上がり、セリナへと歩み寄る。

一歩ごとに、甘ったるい聖油の匂いがセリナの鼻腔を突いた。

「そこであなたに新たな名誉を与えます！赦された聖女として、世界を浄化するための気高き巡礼の旅に出ることを、ここに命じます！」

それは事実上の追放宣言だった。

セリナの隣に控えていた騎士が、冷たい金属の質感を伴った物理メモリを無言で差し出す。

そこには巡礼という名の無期限の追放命令と、ただ一つの貸与品リスト。

そして、その機体を動かすためのマスターアクセス権限が封じられていた。

### **貸与品：オルガマシン『セラフィム・アウラ』1機**

内部の反対を押し切り、エレノアが「慈悲」として与えた、白銀の棺桶。

セリナは、掌に押し付けられたその冷たい金属の重みを、ただ感情のない瞳で眺める。

「セリナ。あなたには我らが教団の、新しい希望の象徴として世界を照らす光となっています」

「.....はい」

エレノアがその手を取り、高々と掲げる。

信徒たちの熱狂した歓声と拍手が、大聖堂に響き渡った。

「拝命、いたします」

空っぽの心から漏れ出たその声は、熱狂の中に誰にも聞こえることなく消えていった。

こうしてセリナは、聖女として、英雄として聖都を追放された。

偽りの凱旋式の後。

彼女はたった一人、自らの墓標となるべき白銀の機体へと静かに歩を進めるのだった。

## 2. 父と娘の巡礼

肺を焼くような、乾いた砂風。

カイは、イラストリアスが散った海とは正反対の、ひび割れた荒野を歩いていた。

肩に食い込むバックパックの暴力的な重み。

ありったけの食料と水が、彼の体力を削り取っていく。

そして胸には自作のスリングで、生後半年を迎えたばかりの娘フランドルを抱いている。

砂を噛むような旅路。

耳に届く微弱な寝息だけが、カイの精神を繋ぎ止める唯一の命綱だった。

あの日以来、まともな睡眠はない。

乾ききった瞼を閉じれば、魂を丸ごと抉り取られるような喪失感が這い上がってくる。

イラストリアス。

その名を口の端に上らせることさえ、今の彼にはできなかった。

ただ胸に抱いた娘の、小さな心音だけを道標に。

東へ、東へと歩を進める。

『白銀の奈落』事変は、世界の骨組みを完全に破壊していた。

道中、カイの網膜に焼き付いたのは剥き出しの絶望。

かつて連合の管轄だった都市は統治能力を失い、瓦礫の影からは獣のように飢えた難民たちの視線が突き刺さる。

鉄の錆と、死臭の入り混じった風。

破壊され尽くしたオーダーの検問所。

その白い残骸が、巨大な組織の失墜を静かに物語っていた。

赤ん坊が安らかに眠れる場所など、この地上のどこにもない。

夜の闇。

フランドルは火がついたように泣き叫んだ。



野盜や連合の残党兵から逃れるため、カイはカビ臭い廃墟の地下や、湿った洞窟に身を潜める。

息を殺し、ただ娘を抱きしめ続けた。

だが、限界はとうに超えている。

合成スープのストックは切れ、おしめを替えるための清潔な布すらない。

そして今——フランドルは、異常な高熱を発していた。

胸元から伝わる、焼け焦げるような小さな体温。

浅く、不規則な呼吸音。

なす術はなく、ただ自分の体温で温め続けることしかできない。

「死なないでくれ……頼む、死なないでくれ」

擦り切れた喉から絞り出す祈り。

愛する女性は散った。

信じた正義は泥に沈んだ。

そして今、胸の内で明滅する命の火さえも、風前の灯火。

かつての整備士としての聡明な光は、すでにカイの瞳にはない。

泥と疲労で濁った眼窩に宿るのは、血走った焦燥。

ただ娘を救うという、父親としての獣のような本能だけ。

いつしか、乾いた風は冷たい氷雨へと変わっていた。

体温を容赦なく奪う、水の刃。

泥濘む足元。

カイは引きずるようにして、重い足を目の前にそびえる巨大な廃工場のシルエットへと向かわせていた。

雨風を凌げる、わずかな暗がりだけを求めて。

## 幕間劇Ⅰ:星々の残痕

### 【Ⅰ：希望の星の、揺り籠と観測者】

世界統合連合の最高練度医療施設。

その一室は純白の壁と、生命維持装置の心臓の鼓動にも似た穏やかな電子音だけに満たされていた。

部屋の中央に鎮座する、ガラス張りのカプセル『ゆりかご』。

内部を満たすナノ医療ゲルの人肌のように温かい淡い光が、一人の少女の成熟しきった裸体を、まるで聖なる娼婦の美術品のようになつとりと浮かび上がらせている。

セレナ・ノヴァリスは一切の衣服を纏わず、その粘り気のある温かいゲルの中で、全ての意思を奪われたように静かに身を委ねていた。

AIによる管理効率を最大化するため、彼女の四肢は拘束具によってだらしなく、わずかに開かされている。

終わりなき凌辱の儀式のため、祭壇にその身を捧げるかのような完全な弛緩。

抗う術のない無防備な姿を世界に晒していた。

銀白色の長い髪が、水中の乳白色の花のようにゆらゆらと漂う。

重力に逆らって豊満にそそり立つ乳房の頂点。

そこには精神状態を監視するための極小の薔薇色センサーが、まるで小さな舌のように静かに吸着していた。

AIが彼女の精神に強制的な安らぎを与えるたび、センサーは微弱な電流を放つ。

乳首の先端をちりりと小さく、しかし執拗に震わせる。

そして、無防備に開かれた絹のような脚の付け根。

神秘の花園は、その恥ずかしい襞の奥まで完全に露わになっていた。

湿った熱を帯びるその花卉には、栄養と薬液を直接子宮へと送り込むためのカテーテルが、奥深くへとぬるりと差し込まれている。

もう一本は排泄を管理するため、その後ろの固く閉ざされた蕾の入り口を無理やりこじ開けるように、無慈悲に、しかし優しく挿入されていた。

その完璧に管理された生きた『作品』を、ガラスの向こうから一人の男が静かに見つめていた。

自らの最高傑作を慈しむように。

白衣を纏った初老の男。

その瞳に、娘を見つめる父親としての温かみなど一片も存在しない。

あるのは、自らが開発したシステムが完璧に機能していることへの、技術者としての冷たい満足感。

そして、かつて自分のものだったはずの女（妻）にあまりにもよく似てしまった、この娘の無防備な肉体に対する暗くよじれた支配欲だけだった。

彼にとって、セレナは愛すべき娘ではない。

連合の最も価値ある『資産』であり、自らの最高傑作。

そして何より、ノヴァリスの血統を受け継ぐ次世代の『希望』を生み出すための、完璧なる母胎だった。

彼女の意識は、AIが生成する心地よい夢の中にあった。

だが、時折夢の狭間で彼女は思い出す。

イラストリアスが最後に見せた、あまりにも気高い光の残像を。

その度に、AIの管理下にあるはずの心臓が、プログラム外の不規則な鼓動を刻む。

それを見た男は、手元のコンソールを指先でなぞった。

（.....感情の揺らぎか。まだ不純物が残っているか。だが、それすらもデータとなる）

彼がその些細な操作を行うと、生命維持装置はそれを『エラー』と判断する。

彼女を落ち着かせるため、カプセル内部のゲルに特殊な精神安定剤を混入させた。

薬液はカテーテルを通じ、彼女の最も敏感な粘膜から直接体内へと注ぎ込まれていく。

「.....ん.....っ.....」

夢と現実の狭間で、セレナの潤んだ唇から無意識の甘い吐息がこぼれ落ちた。

それを見た男の口元に、歪んだ愉悦の笑みが深く刻まれていく。





（そうだ。それでいい。お前のその完璧な肉体と遺伝子こそが連合の未来を創るのだ。お前を超える、感情に決して揺らがぬ真の希望を.....）

連合の『希望の星』。

ガラス張りの揺り籠の中で、彼女の長い長い贖罪の日々は、実の父親という最も身近な観測者の下で、まだ始まったばかりだった。

## 【Ⅱ：黒鋼の獅子の、終わらない問い】

ネオ・テラン同盟、前線基地『ヴァルハラ』。

その薄暗いシミュレーション・ルームに、レイス・クロウはもう何時間も閉じこもっていた。

立体ホログラムに繰り返し再生される、最後の光景。

『白銀の奈落』が自らを光の奔流へと変え、メテオ・ハーヴェスターの群れを飲み込み、消滅していくあの瞬間。

「.....なぜだ」

誰に問いかけるでもなく、レイスは叫んだ。

汗で頬に張り付いた赤いポニーテールが、モニターの光を鈍く反射する。

彼女は憎しみを晴らすために、あの戦場へ向かった。

決して超えることのできなかった好敵手との、最後の決着をつけるために。

それなのに。

自分は、その憎むべき相手によって命を救われた。

あまりにも矛盾した事実。

実力主義を信条とする彼女の魂が、その非合理的な結末を理解できずに悲鳴を上げていた。

「——隊長。そろそろ休息を」

部下の気遣うような声が背後からかかる。

レイスはそれに答えず、ただ、ホログラムに向かって手を伸ばした。

その指先が、光となって消えていくイラストリアスの姿を空しくすり抜ける。

かつて、撃墜したハウンドの残骸の中で彼女を見つけた、あの日の記憶が蘇る。

五体満足な肢体を無惨に拘束され、極太のチューブを繋がれた生体部品として使い捨てられていた、あまりにも冒瀆的な姿。

連合の非道な所業への、底知れぬ怒り。

そして、尊厳を完全に破壊されながらも、なお気高く舞い続けた好敵手への、歪んだ尊敬。

「.....貴様は、最後に、なぜ私達を護った.....」

彼女の問いに、答える者はもうどこにもいない。

黒鋼の獅子の心に刻まれた、永遠の傷跡。

その痛みだけが、彼女がまだ生きているという唯一の証だった。

「——隊長。弟君から、通信が入っております。機体のオーバーホールが終わったと」

背後からの部下の声に、レイスはゆっくりとホログラムから手を下ろした。

自分には、まだ守るべき者がいる。

この過酷なネオ・テランの階級社会で、たった一人の弟を、そして自分を慕う部下たちを生き延びさせるためには、立ち止まることなど許されないのだ。

たとえ、自分たちが生き残るための冷徹で合理的な選択が、いつか血も涙もない機械的なシステムへと変貌していくのだとしても。

「.....分かった。すぐに行く」

赤い瞳に宿っていた感傷を完全に焼き切り、彼女は再び、感情のない傭兵の顔へと戻っていった。

### 3. 荒野の聖女

聖都を後にしてから、幾つの夜を越えただろうか。

セリナはもう日にちを数えるのをやめていた。

彼女が今いるのは、かつてハイウェイだった巨大建造物の残骸の上。

アスファルトはひび割れ、そこから錆びた鉄筋がまるで巨大な獣の肋骨のように突き出している。

空っぽの心。

ただ生きるためだけの行動の反復。

夜は人目を避けて機体をスリープモードにし、浅い眠りにつく。

昼は汚染されていない水源を探し、最低限の食料を口に運ぶ。

その全てが、ひどく他人事のように感じられた。

唯一の同伴者は、罪の証である白銀の機体『セラフィム・アウラ』。

黒い拘束具を外され、かつての流麗な姿を取り戻したそのフォルムは、この荒廃した世界ではあまりにも目立ちすぎた。



故に、常に廃墟の影から影へと移動し、身を隠し続ける。

その日も、そうなるはずだった。

不意に、機体のセンサーが警告音を発するまでは。

『——見ろよ！ あんな上玉のオルガマシン、初めてだぜ！』

下卑た通信が、強制的に割り込んでくる。

『コアも極上に違いねえ！ 久しぶりに新鮮な女を、しゃぶり尽くせるぞ！』

眼下の瓦礫の陰から現れたのは、3機のパルスマシン。

どの勢力にも属さないハイエナ、『灰犬（Ash Dogs）』の部隊だった。

醜悪に改造された機体が、獲物を見つけた獣のように、ゆっくりとセラフィム・アウラを包囲していく。

セリナの心に何の感情も浮かばない。

戦闘が長引けば、それだけ機体が摩耗する。

その冷たい事実だけが、彼女の思考を支配していた。

灰犬の1機が、威嚇するように肩部のポッドから旧式のロケット弾を放つ。

だが、誘導性能もない鉄の塊など、アウラの敵ではない。

「……邪魔」

誰に向けられたものでもない呟き。

ロケット弾が届くより早く、背部のメインスラスタが蒼い炎を噴いた。

強烈なGが、飢餓状態のセリナの肉体をシートに深く押し付ける。

機体を強制的に横滑りさせる、姿勢制御バーニアの連続噴射。

アウラは空中で鋭角に軌道を変え、無骨な弾幕の隙間を縫うように敵機の懷へと潜り込んだ。

プラズマ・ブレードの起動。

超高温の刀身が横薙ぎに一閃する。

分厚いスクラップの装甲が赤熱し、泥のように溶け落ちた。

相手のコックピット——その内部で絶叫を上げたであろう男と、生体コアとして組み込まれた名も知らぬ女ごと、正確に両断する。

切断面から高圧のオイルと血液が混ざり合って噴出し、焦げ臭い異臭と共に蒸発していく。

赤黒い雨がアウラの装甲を汚しても、セリナの心は動かない。

『なっ、一撃で！？ 冗談じゃねえ、なんだあの推力は！』

先ほどまでの下劣な嗤い声は、一転して恐慌状態の悲鳴へと変わっていた。

残る2機が怯え、メインスラスターを吹かして左右に散開した。

『ビビるな、距離を取れ！ 挟み撃ちにして、ガトリングで蜂の巣にしてやる！』

スピーカーから垂れ流される、耳障りな三下たちのわめき声。

セリナは小さく舌打ちをした。

ただでさえ機体は限界に近いというのに、無駄に散開されては各個撃破の手間が増える。

ここからガトリングで撃ち合い、飛び回るハエを叩き落とすのは最悪の選択だ。

機体の関節アクチュエーターに、どれだけの負荷がかかるか。

ならば。

彼女は苦渋の決断を下す。

背部、翼のウェポンベイが静かに展開。

高性能誘導ミサイルが牙を剥く。

目標の未来位置（リード）を火器管制システムに演算させるため、思考を『サイコ・ミュー』へと直結させる。

極度の飢餓と疲労により、彼女の体内にはオルガデバイスを潤す愛液すら枯渇していた。

乾ききった粘膜を、冷たい白磁が無理やり擦り上げる。

機体と神経回路をリンクさせるためのパルスを、暴力的に搾り取っていく。

「あ、ぐっ……！」

ヤスリで内壁を削られるような激痛。

喘ぎながらも、セリナは冷徹にトリガーを引き絞った。

ソリッドロケットモーターが点火し、2条の白煙が尾を引く。

その光景に、灰犬の1人が通信越しに嘲笑った。

『ちっ、ミサイルか！ だが、当たるかよ、そんなもん！』

だが、その嘲笑はすぐに絶叫へと変わった。

自分たちへと向かってくる光点が、ありえない角度で軌道をねじ曲げたのだ。

『こいつ、そこら辺の安物じゃねえ！！』

空力舵面と推力偏向ノズルの暴力的な挙動。

アウラから放たれたミサイルは、回避行動を取るパルスマシンの予測進路に正確に食らいつき、その胴体を撃ち抜いた。

『ッ！！』

鼓膜を揺らす轟音。2つの鉄屑が空中で爆散する。

ほんの数十秒の出来事だった。

戦いが終わり、再び静寂が訪れる。

敵を粉碎したことで、サイコ・ミューから強烈な快楽信号が脳髄へと叩き込まれる。

だが、干からびた肉体が空しく痙攣するだけで、もはや蜜が溢れることはない。

痛々しく乾いた絶頂の余韻。

その中で、セリナは無感動に機体の状況を確認した。

ミサイルの残弾数は、あと僅か。



そして何より彼女の心を重くさせたのは、モニターの片隅に表示された、1つの警告だった。

『関節部アクチュエーター二、稼働限界値ヲ超エル負荷ヲ検知。  
要、整備』

たとえ戦闘時間が短くとも、このあまりにも精密な機体は確実に摩耗していく。

自分では決して直すことのできない深部が、少しずつ壊死していくのだ。

大聖女エレノアの冷たい笑みが脳裏をよぎった。

弾薬が尽きるのが先か、機体が壊れるのが先か。

どちらにせよ、この機体は自分の翼であり、間違いなく棺桶なのだ。

警告を無視し、セリナは再び操縦桿を握った。

この鉄の棺桶が完全にその機能を停止する、その日まで。

自分の旅は終わらない。

終われない。

——その先に、何があるのかも、知らぬまま。

---

作品名: 白銀の聖痕3『未来への選択』

発行日: 2026年5月7日

発行者: XYZ\_L

連絡先: <https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

### 【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

### 【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

### 【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。

---

# 白銀の鑄造

## (キャスティング)



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系  
ディストピア・ハードSF・メカ・バトルモノ  
「オルガ・コード」シリーズ

著:XYZ\_L

# 断章:白銀の鑄造(キャスティング)

## 1. 選別:静寂と祈り

「祈りの時間は終わりだ。……結果が出た」

教団運営の孤児院。凍てつくような石造りの礼拝堂に、監査官の無機質な声だけが反響した。

銀色の髪を持つ少女、アリア。

彼女は薄汚れた修道服の裾を握りしめ、石床に食い込む膝の痛みに耐えていた。

誰よりも早く起き、誰よりも熱心に、擦り切れるまで聖典を読み込んだ。才能を持たざる彼女にとって、信仰こそがこの地獄で唯一すぎるべき命綱だったからだ。

「個体名、アリア。……オルガ・リンク適性値、Dマイナス」

監査官は、ゴミを見るような目で書類を閉じる。

「不合格（廃棄）だ」

少女の細い肩が、跳ねるように震えた。

Dマイナス。

それはパイロットはおろか、整備の補助（生体部品）すら務まらない、完全な欠陥品の烙印。

ここを出されれば、待っているのはスラムでの野垂れ死にか、裏街で娼婦として消費される未来しかない。

「——神様、どうか.....」

絶望に染まる少女の顎を、監査官の革手袋が強引に持ち上げた。

ギチ、と革が鳴る。

値踏みするような冷たい視線。

恐怖に震える青い瞳、栄養不足だが白磁のように透き通る肌、そして狂氣的なまでに純粋な信仰心。

男はそれらを、美術品を鑑定するようにねっとりと舐め回した。

「.....しかし。君には別の『才能』があるようだ」

「え.....？」

「我々が求めているのは、民衆を熱狂させる『聖女の偶像（アイドル）』だ。適性値など、後からいくらでも埋め合わせればいい」

監査官は氷のような笑みを浮かべた。

「君のその無垢な顔と、中身の『空洞』さえあればね」

アリアは、すぎるように男を見上げた。

「私、なんでもします.....。神様のお役に立てるなら.....っ」

「いい返事だ。だが、最後にもう一度だけ尋ねよう」

監査官は彼女の運命を決定づけるように、親指でその唇を強く押し開いた。

「このプログラムを受ければ、君は二度と『普通の人間』には戻れない。……恋をし、安らかに死ぬ自由を根こそぎ奪われることになるが、それでもいいのかね？」

アリアに迷いはなかった。

廃棄されるという「無価値な死」よりも、神の部品として「利用される生」を、彼女の狂信が選んだのだ。

「はい。……私は、神様の『器』になりたいのです」

「……特別プログラムへようこそ。アリア」

監査官の笑みが深まった。

「ただし、覚悟したまえ。そこは、祈りだけで救われる場所ではない」

少女は迷わず頷いた。

自分の存在価値を証明できるなら、どんな苦行にも耐えるつもりだった。



それが、自らの肉体を内側から造り変え、魂を悪魔に売り渡す契約  
だとは知らずに。

---

作品名: 白銀の鑄造(キャストイング)

発行日: 2026年5月7日

発行者: XYZ\_L

連絡先: <https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

### 【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

### 【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

### 【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。

---